

みかん民主主義 -コレクティブとは?-

2022年4月23日

紀南アートウィーク 藪本 雄登

1 みかんは、コレクティブか

批判を受けながらも、現代のアート実践において、美術史家クレア・ビショップが述べる「社会的転回 (social turn)」が一定の影響力を保持し続けている。社会的転回とは、現代アートの実践において、「美的」価値から「社会的」価値への移行が進んでいる状態を意味する¹。つまり、現代アートの実践において、作品の態様や新規性より、社会や政治に対する現実的な貢献や影響を重視する潮流のことである。

和歌山県紀南地域のコミュニティも、その他の地域同様、市町村合併、過疎化、インターネット社会の進展等の複合的な要因によって、いわゆる「地縁」に基づく伝統的かつ世襲的な枠組みが「リキッド化 (液状化)²」しつつある。その溶解しつつあるコミュニティにおいて、今までとは異なる「新たな関係性」を創出し、再構築するために「芸術」が求められている。増加の一途を辿る地域芸術祭は、そのような背景の証左であろう。

近年、横浜トリエンナーレやドクメンタ等の重要な芸術祭において、アート・コレクティブが芸術監督を担っていることから明らかな通り、芸術を通じて「新しい関係性」を再構築する上で、アート・コレクティブという集団の存在は重要度を増し続けている。アート・コレクティブは、持続性や生存可能性の観点から、アーティスト単独ではなく、複数でチームを構成し、その集団的主体性をひとりのアーティストと捉えるような動きである。過去、アジア各地のアーティスト・コレクティブと関わってきた経験を踏まえると、コレクティブには、①共通の目的、価値観を有しながら、②異なる技能やバックグラウンドを持つ人達が緩やかに集まり、③広く外部と接しながら集合的实践を行う、という傾向がある。このような「コレクティブ」という生存のための方法は、みかんの世界においては極めて当然の方法論である。

- みかんは、ある種の集合体だ -
とある紀南のみかん農家

これは、紀南地域のみかん農家へのフィールドワークを重ねる中で特に印象に残った言葉だ。みかんが得た水分や養分は全体で共有されるが、細胞自体は動物のように全体に移転することはない。例えば、外部から接ぎ木される枝の遺伝子は、クローンとして別個の存在として維持される仕組みとなっている。そのような観点から、異なる存在が同居しながら、統合されているみかんは、まさに集合体 (コレクティブ) のようなものではないか、ということである。また、みかんの果実もある種の集合体だ。みかんを構成する果皮、内果皮、維管束等、その境界は曖昧で、どこからどこまでが全体で、どこからどこまでが部分かは定かではない。みかんの木、みかんの実も、緩やかなコレクティブなのである。

2 みかんに民主主義はありうるのか

上記で述べた (集合体としての) みかんは、どのように思考をしているのだろうか。みかんの視座を得るために、ミッシェル・セールの「準-客体」の理論のみかんに適用してみたいと思う。「準-客体」の理論とは、受動的な客体 (モノ) でありながら、同時に主体として能動的かつ自律的な働きをもって機能する対象の見方である³。みかんを「準-客体」として捉え直せば、客体 (みかん) は主体 (ヒト) に

¹ 星野太著『美学のプラクティス』水声社、2021年12月 詳細は、第二部「関係」を参照

² ジグムント・バウマン著、森田典正『リキッド・モダニティ ー液状化する社会』大月書房、2001年

³ 清水高志著『ミッシェル・セール: 普遍学からアクター・ネットワークまで』白水社、2013年

対して従属的な関係から再構築され、むしろ、複数のヒトとみかん、さらにいえば、みかんとみかんと
の能動的な相互関係によって、複数のみかんからなる動態を構成することができる。つまり、ブルー
ノ・ラトゥールがいう「モノの議会⁴」のように、無数の「ヒトならざるもの」に、民主主義といった公
益性や社会性を見出せる可能性があるのではないだろうか⁵。

「民主主義」とは多義的な言葉である。その語源であるギリシャ語の「デモス」とは「人々」のことで
あり、「クレイトス」とは「権力」を意味する⁶。そして、その重要な要素は、「自由（規則と権力から
の分離）」と「平等（資源と権力の公平な分配）」であり、「自由」と「平等」は、「根」と「枝」の
関係のように異方性を有している。すなわち、「自由」と「平等」の探求は、常に逆向きに作用し、一
方が増大すると、他方が減少する。この二つの異方性の調和するのが民主主義の機能である。
集合体としてのみかんは、どのように「自由」と「平等」を調和しているのだろうか。また、みかんに
おける公共財とは何なのだろうか。

みかんの一大生産地である和歌山県紀南/熊野地域に住む私達は「根の堅州国（ねのかたすくに、古事記
に記載される地底奥深く、海の彼方など、現世から遠く隔たったところにあると考えられる世界であり、
スサノヲ神が宰領する国ともされる。）」の住人であり、「地中の神」であるスサノヲ神を祀ってきた。
みかんに関する上記問いに答えるためのヒントは、視覚で捉えられない、地中で謎に包まれた、みかん
の「根」にあるのではないかと考える。

この点、プラトンは、私達の「頭」、つまり、「理性」を「根」に例えており⁷、アリストテレスも『靈
魂論』において、「動物において頭にあたる部分は、植物では根にあたる」と述べている。このように、
みかんの知性が想起される場所は、「根」なのではないだろうか。
また、哲学者のエマヌエーレ・コッチャが「植物ほど、自分たちを取り巻く世界に密着している生物は
いない。（中略）可能な限り世界に密着するために、植物は体積よりも面積を優先するかたちで、身体
を発達させている」と述べているように、植物は、動物とは異なり、感覚器官がない代わりに、根を地
中に張り巡らせることによって、世界を抱き続けている存在である。植物は、根を通じて世界と常に接
続し続けている。

みかんにとっての公共財は、自身の状態や自身が浸っている環境の状態を獲得し、水分と養分を万遍な
く提供する根なのではないだろうか。そして、みかんは、根を通じて、世界を認識しながら、「種の存
続」という思想を基礎に、その根、枝、実等は、まるで意思があるように集散的に活動している。彼ら
の意思は、単に植物生理やホルモンの作用のみで説明することができるのだろうか。

紀南のみかん農家にヒアリングを行ったところ、みかんには、人間が刑法等を制定するような、自由を
制限するような強権的な仕組みはないようだ。例えば、みかんの根は、一部の枝や葉等に水分や養分を
行き渡らせないような措置を取ることはできない。逆にいえば、「根」は常に、全体に対して平等な措
置を取り続けている。常に平等であるからこそ、幹や枝は常に自由に活動することが可能である。つま
り、根からの命令により、幹や枝が伸びることを停止させることはできない⁸。

「根」は、みかんという集合体の公共財であり、「平等」と「自由」を完全に保障している。みかんは、
ヒトの民主主義を嘲笑するように、ある種、完璧な民主主義を構築しているのではないだろうか。

⁴ ブルーノ・ラトゥール著、川村久美子訳『虚構の「近代」—科学人類学は警告する』新評論、2008年

⁵ もちろん、みかんに民主主義を観念することは馬鹿げた話かもしれない。むしろ、みかんに人間の基準を当てはめるこ
このほうが、人間中心主義的かもしれないということは認めた上で、みかんの意思について思索する。

⁶ エツィオ・マンズィーニ著、安西洋介、八重樫文訳『日々の政治 ソーシャルイノベーションをもたらす デザイン文
化』ビー・エヌ・エヌ新社、2020年

⁷ Emanuele Coccia著、山内 志朗著『植物の生の哲学：混合の形而上学』勁草書房、2019年

⁸ ただ、自由に伸びすぎた枝は、重力により自動的に折れるなどして排除されるような自然の摂理に基づいた処理がなさ
れている。

3 最後に -みかんとヒトの公共財は何か?-

最後に、ヒトの社会に戻ってこよう。現代アートの実践は、上述の通り、美的価値から社会的価値に重点が移ってきている。そして、「ヒトの社会」の中に、「みかんの社会」を混ぜ合わせてみる。ヒトとみかんにおける民主主義の土台となる公共財とは、一体何なのだろうか。

中空に「根」を持つヒトと地中に「根」を持つみかんは、上下逆さまの関係にあるが、これらの間に「重なり合う公共財」を見つけられないだろうか。この「重なり合い」を見出すには、「根」のことを深く思考すること、そのために、ヒトが反転してみかんと向かい合うことが重要だ。

和歌山県紀南地域がその反転のための要所になっていくことは間違いない。私達は、天空、地表、地下の境界を行き来するスサノヲ神の末裔であり、「根の国」の子孫なのだから。

以 上